ツェラーンの詩『ひとつに』をめぐって

金子英雄

Resümee

In der Rede „Der Meridian“ bezeichnete sich Paul Celan als einen „mit den Schriften Peter Kropotkins und Gustav Landauers Aufgewachsenen“. Im Gedicht „In eins“ wollte er wieder zum Ort zurückkehren, wo die Gesinnungen von Kropotokin und Landauer, die linksgerichteten, menschlichen Weltanschauungen, lebendig sind. Celan war ein Mann mit seinem „alten Herzen eines Kommunisten“.

Die erste Strophe des Gedichtes beginnt mit einem Datum, „Dreizehnter Feber“. Am 13. 2. fühlte sich Celan mit „Peuple de Paris“ wieder dort zurückgekehrt, wo der Revolutionen und Widerstandsbewegungen in Frankreich, Österreich, Spanien, Russland und Deutschland gedacht wird. Das heißt: „Peuple de Paris“ ist ein Sinnbild und bedeutet das zeit- und raumumspannende Zueinander der Menschen, die an der Massendemonstration gegen die OAS in Paris, dem Wiener Arbeiteraufstand und dem Spanischen Burgerkrieg usw. teilgenommen haben. Das Gedicht ruft die Leute, die mit „Peuple de Paris“ und „Dreizehnter Feber“ in Verbindung stehen, hervor aus verschiedenen Orten und Zeiten, und führt sie zur Begegnung und verbindet sie wie ein Meridian, damit sie dazu gebracht werden, *in eins* gebildet zu werden und allesamt „No pasarán“ und „Friede den Hütten!“ gegen alle Mächte der Reaktion auszurufen.

Keywords：Schibboleth, Solidarität, Revolution, Meridian, Mandelstamm

IN EINS	ひとつに
Dreizehnter Feber. Im Herzmund	2月13日。心の口のなかに
erwachtes Schibboleth. Mit dir,	目覚めた合言葉。きみとともに,
Peuple	パリノ
de Paris. *No pasarán.*	人民ヨ。**奴ラヲ通スナ**。
Schäfchen zur Linken: er, Abadias,	子羊を左に――彼，アバディアス,
der Greis aus Huesca, kam mit den Hunden	ウエスカ出身の老人が，犬たちとともに

über das Feld, im Exil	野を越えて来た，流謫のなかにあって
stand weiß eine Wolke	白く浮かぶ　人間的気高さの
menschlichen Adels, er sprach	ひとひらの雲であった，彼は語った，
uns das Wort in die Hand, das wir brauchten, es war	私たちの手のなかに，私たちが必要とした言葉を，それは
Hirten-Spanisch, darin,	牧人のスペイン語だった，そのなかに，
im Eislicht des Kreuzers »Aurora« :	巡洋艦「アウロラ」の氷の光のなかに――
die Bruderhand, winkend mit der	兄弟の手，言葉の大きさの目から
von den wortgroßen Augen	取りはずされた眼帯を振って
genommenen Binde — Petropolis, der	合図をする手が――ペトロポリス，あれらの
Unvergessenen Wanderstadt lag	忘れられない人びとの移動都市が
auch dir toskanisch zu Herzen.	きみの心にもトスカナのように横たわっていた。
Friede den Hütten! [1]	**苫屋に平和を！**

詩は日付でもって始まる。パウル・ツェラーン（Paul Celan 1920-1970）の全詩群の中で，月名だけが登場する詩はいくつもある。だが，月名に加えて日にちをも含む表現が見受けられるのは，この『ひとつに（In eins）』と題された，1963年刊行の第四詩集『誰でもない者の薔薇（Die Niemandsrose）』に収録された詩だけである。日付というとき，われわれの脳裏に直ちに浮かぶのは，何よりもビュヒナー賞受賞講演『子午線（Der Meridian）』における「1月20日」であろう。詩作品および詩をめぐるエッセイや講演などにおいて，月と日の両方を記した言葉が登場するのは，これら二つの場合のみである。ツェラーンがそれを意識していなかったはずがない。したがって『ひとつに』における「2月13日」は，ツェラーンが『子午線』における「1月20日」と等価の表現として呈示したものと考えてよかろう。「1月20日」について，『子午線』のなかでツェラーンはこう語っていた。

> もしかしたら，どのような詩にも，それ自身の「1月20日」が書き込まれていると言っていいでしょうか。もしかしたら，今日書かれる詩の新しさは，まさしくこのこと，つまり，そこでこそきわめて明瞭に，こうした日付を記憶しつづけようと試みられている，ということでしょうか[2]。

「1月20日」とは，元来はゲオルク・ビュヒナーの短編小説『レンツ』の冒頭の語句である[3]。その物語作品は，人間的に生きようとしながらも（あるいは人間的に生きようとするがために），やがて狂気へと至り，遂には孤独で悲惨な死を迎えざるをえない運命の下にある，一人の人物をめぐる未完の物語である。この点で「1月20日」はまさに個人史的なものを象徴する日付である。だが，その日付は，そうした個人史的な日付にとどまるものではない。なぜなら，「1月20日」という日付に事寄せて，講演『子午線』の中でツェラーンが暗黙裡に聴衆に想起させようとするのは，「ユダヤ人問題の最終的解決」という名目のもとにナチスがユダヤ人絶滅を最終決定した，「1942年1月20日」開催の，かの「ヴァンゼー会議」でもあるからである。つまり

「1月20日」とは，個人史的なものと人類史的なものとが「ひとつに」なった日付なのであり，「2月13日」もそうした日付として呈示されたものであるのは言うを俟たないだろう。ツェラーンの身近にあった友人によって，ツェラーンの詩はすべて自伝的なものから発していると指摘され[4]，またツェラーン自身も「［私の詩の］どの言葉も現実との直接の関わりで書かれています[5]」と発言しているように，彼の詩の真骨頂は，個人史的なものから出発しながら，歴史的な現実と鋭く切り結ぼうとするところにある。したがって詩『ひとつに』を理解するためには，まずは「2月13日」という日付によって喚起される個人史的および歴史的な背景を探ることから始めなければならない。

この詩は1962年1月23日に初稿が書かれ，そして5月24日の第四稿を経た後，冒頭に掲載した通りの決定稿に至ったことが知られている[6]。外的および内的にこの頃のツェラーンがどういう状況に置かれていたか，現在ではある程度まで明らかになっている。例えば，この詩の初稿と同じく1962年の1月頃にツェラーンが書いたものと推測されている，フランスの哲学者ジャン＝ポール・サルトル宛の手紙がある。これは遺稿として残されていたものであり，結局は送付されなかった手紙の下書きなのであるが，その中でツェラーンは次のように書き出している。

> ジャン＝ポール・サルトル様，
> 目下ご多忙中のことと承知してはおりますが，あえてご相談いたしたき儀がございます。私は著述業にたずさわる者であり，――詩を書いております，それもドイツ語の。しかも私はユダヤ人であります。数年前から，とりわけ昨年から，私はある中傷キャンペーンの対象にされております。そのキャンペーンの細分化しての広がりようときたら，一目見て文学上の陰謀と呼ばれるものをはるかに超え出ております。端的に言ってまさしくこれはドレフュス事件である，と私が申したなら，定めしあなたは驚かれることでしょう――[7]

この手紙の中で「中傷キャンペーン」と言われているのは，ツェラーンの詩が先輩詩人であったイヴァン・ゴルの詩の剽窃であるとする，いわゆる「ゴル事件」に端を発して，ツェラーンの詩の評価をめぐって長らくドイツの文芸ジャーナリズムを賑わした一連の報道を指す。剽窃など事実無根であるとの判定が公式に出された後も，その余燼はくすぶり続けた。そして1961年頃からは，サルトルへの手紙において自身が「ユダヤ人」であることが強調され，また「中傷キャンペーン」をかの「ドレフュス事件」になぞらえていることからも分かるように，ツェラーンは自分の詩にたいする中傷的な言動の背後に，第二次大戦後も依然としてドイツに残存する反ユダヤ主義の暗流や，ネオナチズムの擡頭があることを強く意識するようになったのである。そうした，かつてのナチズムやファシズムと結びつく反動的な動きは，何もドイツだけに限ったことではなかった。ツェラーンが1948年以来住みついていたフランスにあっても同様であり，そのような状況の中にあっていよいよ孤立感を深めてゆくツェラーンの姿を，かつてのルーマニア時代の友人に宛てた手紙の，次のような文句からも見て取ることができよう。

> ここフランスで，ぼくたちに友人が一人もいない，などということはあり得ないことだと君は言う。でもしかしそれは……あり得ることなのだ。ファシズムという癌が，変装していようといまいと，ど

れほど深く浸透しているのかを忘れないでくれたまえ[8)]。

先のサルトル宛の手紙の中で，ツェラーンがサルトルに対して「目下ご多忙中云々」と述べているのは，この頃サルトルが深くコミットしていた，フランスからのアルジェリアの独立をめぐる，いわゆる「アルジェリア戦争」に対する抗議行動と，そこから発生した事件とを背景にした発言であるのは間違いない。アルジェリア戦争の激化とともに，サルトルは戦争を遂行するド・ゴール政権に対して反対の姿勢を明確にした。そして反ド・ゴールのデモに参加したり，アルジェリアにおけるフランス軍の残虐行為に対する抗議の発言をなしたり，フランスの若い兵士たちの兵役拒否の権利を主張する声明（いわゆる「121人声明」）に署名したり，反ファシズム連合を結成したりと，抗議行動の中心人物として多忙を極めていた。そうしたサルトルの自宅に，前年1961年の夏（1961.7.19）とこの年の1月7日の二度にわたり，アルジェリアの独立に反対する極右組織OAS（紛争の終結とアルジェリアの独立を妨害しようとする反動的勢力である極右の「秘密軍事組織（Organisation de l'armée secrète）」の略称）によって爆弾が仕掛けられるという事件が起こったのである。「私はあなたの，正義と真実を見きわめる感性に呼びかけます[9)]」と，先のサルトル宛の手紙でさらに述べているように，自分に対する批判の中に反ユダヤ主義やネオナチズムの策動を見るツェラーンは，圧制や差別に苦しむアルジェリア人に自己の似姿を見，そうしたアルジェリア人に援助と庇護の手を差し伸べ，OASを始めとするファシズム的な反動勢力，すなわち「ファシズムという癌」と果敢に闘おうとするサルトルに共鳴して，助力を求めようとしたのだと考えられる。

詩に「2月13日」という語があらわれるのは，1962年2月20日に書かれた第三稿以降においてである。この「2月13日」という日付が何を表すのかは，従来諸説があった。ところが，遺稿が公にされ，決定稿では削除されることになったが，異稿（第三稿と四稿）において，決定稿における「きみとともに／パリノ／人民ヨ」と「奴ラヲ通スナ」との間に，「Vom Boulevard du Temple bis / zur Rue du Chemin Vert（タンプル大通りから／シュマン・ヴェール通りまで）」という，フランス語まじりの詩句が挿入されていたことが明らかになったことと，これも遺稿の中から発見された一枚のビラとによって，特定が可能となったのである。アルジェリアの独立をめぐる紛争が解決の直前にまでさしかかっていた1962年2月7日に，フランスの文化相アンドレ・マルロー宅に爆弾テロが行われた。実行したのは，サルトルの場合と同じく，極右組織OASであった。マルローは不在で難を逃れたが，同じ建物内に住んでいた4歳の少女が重傷を負った。翌2月8日に，度重なるテロに激怒したパリ市民が，「タンプル大通りからシュマン・ヴェール通りまで」，反OASの大衆デモを行った[10)]。ところがフランス政府はこのデモを禁圧しようとし，デモ隊と警察とが衝突して，8人の犠牲者が出てしまったのである。その5日後の「2月13日」に，犠牲者を悼むための葬儀が挙行され，100万人ものパリ市民が参加した。そしてツェラーンはそれを伝えるビラを保管しており，そこには彼自身の手で「13. Februar 1962（1962年2月13日）」という日付が書き込まれていたのであった。

以上の事実から明らかなように，「2月13日」とは，「1月20日」が1942年1月20日であったように，何よりもまず1962年2月13日という，右翼テロとそれを容認するかに見えるド・ゴール政権に対して，パリの民衆が敢然となした抗議行動と，その犠牲者とを記念する日付である。

「きみとともに／パリノ／人民ヨ」と，そうしたパリ市民に対してツェラーンは共感し連帯しようとしたのである。それが，Peuple de Parisとわざわざフランス語が使用された理由の 一つであろう。そして，この詩の題名を説明する一つとして，1962年2月13日を出発点とする「日付」の周りに，これもまたさまざまな「場所」から「パリノ／人民」にまつわる人たちが呼び集められ，彼らが時空を超えて「ひとつに」なって連帯の輪を，すなわちツェラーンが言うところの「子午線」を形作るという構図があることを前もって指摘しておこう。「パリノ／人民」にまつわる人たちの具体像は，1962年2月13日のパリ市民たちにとどまるものでないのは，詩の最終節の「苫屋に平和を！」が示している。これは元来フランス大革命のスローガン・合言葉の一つであった「Guerre aux chateaux! Paix aux chaumères!（宮殿に戦争を！　苫屋に平和を！）」に由来する。したがって「パリノ／人民」には，フランス大革命時におけるパリ市民も，そしてまた1871年の，史上初めての社会主義革命を目指したとされるパリ・コミューンにおけるパリの民衆たちも含まれると考えるべきであろう[11]。また，「苫屋に平和を！　宮殿に戦争を！（FRIEDE DEN HÜTTEN! KRIEG DEN PALÄSTEN!）」と，語順が逆ではあるが，「苫屋に平和を！」は，農民や労働者に蜂起を呼びかけたビュヒナーの檄文『ヘッセンの急使』にも用いられている[12]。すると，時代に先駆けて虐げられた者たちのためにドイツにおける革命を目指したビュヒナーや，彼の同士であったドイツ人たちも，「パリノ／人民」にまつわる群像のなかに含まれることになろう。しかし，それだけではない。さらに「パリノ／人民」にまつわる人々の具体像を，第一節で使用されるドイツ語にとっての外来語，あるいは方言，それに純然たる外国語であるところの，Schibboleth, Feber, No pasarán といった語が明らかにしてくれよう。Schibboleth はヘブライ語から派生した語であり，Feber はオーストリア方言であり，No pasarán はスペイン語なのである。

詩は「2月13日」で始まり，「心の口のなかに／目覚めた合言葉」という詩句がそれに続く。そしてその「合言葉」は，「奴ラヲ通スナ（No pasarán）」というスペイン語であるとされる。No pasarán という合言葉は，「心の口のなか」で「目覚めた」とされるからには，その合言葉なるものは，唯今まで心の中で眠り続けてきたが，かつて発せられたものでなければならない。それがいつ発せられたものであったのか，われわれは知っている。第二詩集『閾から閾へ（Von Schwelle zu Schwelle）』に収録されている『合言葉（Schibboleth）[13]』なる詩においてである。ルーマニアに住む，かつての文学上の師であったマルグル＝シュペルバー宛のこの頃（1962.3.9）の手紙の中で，ツェラーンはビュヒナー賞受賞講演のなかの「私は私が歩みを始めた場所に立ち戻っています」[14] という自分の発言をほぼその通りに引用しながら，こう続けている。

> そうです，そこに私は，立ち戻っているのです，**まさしく**その場所に。『合言葉』という詩のなかの，あの「奴ラヲ通スナ」という言葉とともに[15]。

また，その前日に書かれた，同じくルーマニア在住のかつての親しい友人ペートレ・ソロモーンに宛てた手紙の中でも，こう述べている。

> シュペルバーにも君の住所宛てで手紙を書く。ぼくは彼にも，ぼくのものであるこのドイツ語で――

痛みにつつまれながらぼくのものとして残ったこのドイツ語で――こう言うのだ。ぼくはいま自分の子午線（それはペートリカ，君の子午線に相通じるものだ）と共に，ぼくが歩みを始めたまさにその場所に立っているのです，と（コミュニストの古き魂をもって，とここでぼくは言ってもよかろう）[16]。

先のシュペルバー宛の手紙にあるように，ツェラーンは詩『ひとつに』でもって「私が歩みを始めた場所」に戻ろうとしたのである。いかにしてか。手紙で言うように「『奴ラヲ通スナ（ノー・パサラン）』という言葉とともに」，そしてまた「2月（フェーバー）13日」(Dreizehnter Feber)という日付とともに。遺稿のビラに書かれていたように，単に「2月13日」(13. Februar)であれば，それは1962年2月13日であろうが，しかし詩においてはFebruarではなく，Feberなるオーストリア方言を意図的に使用することにより，ツェラーンは1962年2月13日のフランスばかりではなく，「ぼくが歩みを始めたまさにその場所」にも戻ろうとしたのである。周知のように，ツェラーンの生誕地は，かつてのオーストリア=ハンガリー帝国の直轄地であったブコヴィーナであった。青年期までツェラーンはその地で過ごしたのであり，彼にとってオーストリア方言のドイツ語は日常語であった。自分はいま「痛みにつつまれながらぼくのものとして残ったこのドイツ語」で，「ぼくが歩みを始めたまさにその場所に立っている」と言うつもりであるとツェラーンが述べるとき，彼はFeberというオーストリア方言でもって，そうしたドイツ語を代表させようとしたのだと言えよう。それではその「私が歩みを始めた場所」とは，一体どういった場所であったのか。

詩『合言葉』においては，No pasarán という合言葉が発せられたのは「2月」であり，場所は「ウィーン」と「マドリード」であるとされていた。「ウィーン」と「2月」によって喚起されるのは，検閲や反対政党の非合法化，労働運動の全面禁止など，いわゆる「オストロ・ファシズム」を推し進めようとしたドルフス政権に対して，オーストリアの労働者が開始した市街戦による武装蜂起であろう。それは1934年2月12日にリンツで発生し，同日中にウィーンに波及した（どうやらツェラーンには，それが2月13日のことであるとする固定観念があったようである）。それと同時にオーストリア各地で市街戦が展開されたが，ドルフス政権は2月15日までには蜂起を鎮圧した。この結果独裁体制が確立することになったが，蜂起はファシズムを推し進めようとする独裁的政権に対し，労働者が連帯して阻止しようとした抵抗運動として，各国の反ファシズム運動に多大な影響を与えることになったとされる。また「マドリード」と「2月」によって喚起されるのは，1936年2月のスペインの総選挙であろう。その選挙で人民戦線派が勝利し，反ファシズム・反封建勢力の人民戦線政府が成立したのである。そしてNo pasarán という言葉は，その後のスペイン内戦において人民戦線側に立った共和国政府軍や国際旅団が，オーストリアの労働者の場合と同じく，ファシズム勢力阻止に向けて連帯するための合言葉なのであった。だがそうした事件が，どうして「私が歩みを始めた場所」であると言われるのだろうか。

イスラエル・ハルフェンの伝記によると，ツェラーンはギムナジウムの生徒であった15歳前後，西暦で言えば1935年前後の頃から，先の手紙の中に「コミュニストの古き魂」とあるように，左翼的な世界観に惹かれるようになった[17]。ツェラーンはその頃からマルクスやエンゲルスの著作を読んだり，反ファシズムサークルの集会に頻繁に参加したりする。そしてスペイン

内戦が勃発すると，スペインの共和制支持派のための義捐金集めに奔走するまでになる。しかし左翼的な世界観に惹かれたと言っても，彼はスターリンが支配するソビエト連邦にたいして心から共感することはできなかったし，またマルクスやエンゲルスの著作も彼を満足させはしなかったようである。彼が感銘を受け共感を覚えたのは，『相互扶助論』や『ある革命家の手記』を著した無政府主義者クロポトキンであり，スターリンによって追放されたトロツキーであった。ハルフェンによれば，「クロポトキンに彼（＝ツェラーン。筆者注）は，マルクス主義者には欠けていると感じていた，暖かな人間性と生命の尊重を見出した[18)]」のである。「ぼくが歩みを始めたまさにその場所」とは，そのような政治的な志操や世界観が息づく空間を言うのだと考えなければならない。また後年のビュヒナー賞受賞講演『子午線』においても，ツェラーンは自身について，「ペーター・クロポトキンやグスタフ・ランダウアーの著作とともに成長した人間[19)]」であると述べている。周知のようにランダウアーとは，第一次世界大戦直後のドイツ革命の渦中にあって，OASと同じような右派勢力によって虐殺された社会主義者である。彼は暴力的な革命には断固反対し，その著作にはクロポトキン同様に「暖かな人間性と生命の尊重」が見出せる無政府主義者でもあった。そして，1966年になってもある手紙のなかで，ツェラーンは次のように言うのである。

> そして［わたしはいまも］――でもほんの少しで，それもある（東欧の――でもそこはまだ存在するのでしょうか？）親密な領域内でだけのことであって――わたしが子供の頃にチェルノヴィツで覚えたあるウィーンの歌のなかにあったように思うのですが……「連帯，連帯」を信じる者です……[20)]

ツェラーンの少年時代からの親しい女友達によれば，「あるウィーンの歌」とは，おそらくベルトルト・ブレヒト作詞ハンス・アイスラー作曲の『連帯の歌（Solidaritätslied）』であろうとのことである[21)]。この歌は1931年に封切られた，有名な労働者映画『クーレ・ヴァンペ あるいは――世界は誰のものか（Kuhle Wammpe oder: Wem gehört die Welt?）』のために作られたものだが，ウィーンの労働者たちによってもよく歌われたという。おそらく1934年2月12日に始まったウィーンの労働者たちの蜂起の際にもこの歌が歌われたことであろうし，そして左翼的世界観に惹かれ始めていたツェラーンたちギムナジウムの生徒は，蜂起に感動すると共に，その歌もまたたくまに生徒たちの間に広まったことだろう。その歌はまたスペイン内戦の際にも国際義勇軍への参加者たちの間で歌われたことが知られている。

そうした若い日に培われた政治的な志操や世界観は，晩年にいたるまでツェラーンのなかに鞏固に保持されている。死の二年前である1968年に，ドイツの週刊誌『シュピーゲル』が行った「革命は可能であるか？」というアンケートに対して，ツェラーンはこう答えている。

> 西独，つまりドイツとの関連に限ってのことではありませんが，私はいまなお変化や転換を期待しております。代理の体制がそれらをもたらしてくれることはないでしょう。そして革命は――社会的であると同時に反権威的なそれは――変化や転換からのみ考えることが出来ます。それは，ドイツで，今日ここで，個々人のもとで始まるものなのです[22)]。

かつてツェラーンは『エドガー・ジュネと夢の夢（Edgar Jené und der Traum vom Traume）』と題されたエッセイにおいて，「さまざまな制度をともなったこの世界を人間および人間の精神の牢獄であると認めて，この牢獄の壁を打ち壊すためには何でもやってみようとする態度[23)]」に対する自分の「信条告白」について云々し，人間の精神が「新たな，止まることのない，自由な運動の法則」を知り，「新たな精神の世界」に入って行って「自由を体験する」[24)] という在り方にこそ，人間の本然の姿があるといったことを述べていた。上記の発言はそれとほとんど同じことを言っているのである。革命とは「変化や転換」からのみ考えることができるというのは，それはつまり，その都度の中央集権的な体制の中にがんじがらめにされ，牢獄のような停滞した社会のなかで喘ぐ人間の精神に，そうした停滞を打ち破らせようとする「新たな，止まることのない，自由な運動」こそ，ツェラーンが考える革命の属性だということである。そしてそうした社会的であると同時に反権威的な革命は，個々人が主体となってのみ考えうるものであるともツェラーンは言う。そのような発言からも，個々人の意識的かつ倫理的行動に基づく革命を提唱する無政府主義者であり，個人よりも中央集権性を重視したボルシェビキ政権による支配と管理についになじむことのなかったクロポトキンや，永久革命を唱えたトロツキーに，ツェラーンが若年から晩年にいたるまで変わることなく親近感を抱き続けていたことが分かるだろう。

詩『ひとつに』において，「2月」をFebruarではなくFeberとすることにより，ツェラーンが戻ろうとした「ぼくが歩みを始めたまさにその場所」とは，そうしたクロポトキンやランダウアーたちの志操や世界観が息づく場所なのである。そこは，何よりも「暖かな人間性と生命を尊重」し，人間の平等と自由を求める人々が，それを妨げる反動的な勢力に対して「ひとつに」なり，No pasarán という合言葉を発して「連帯」する空間にほかならない。1962年2月13日において，確かに「フランスノ／人民」とともにそうした空間が再び創出されたとツェラーンは感じたのである。

詩の第２節では，そうした意味での「フランスノ／人民」の一つの具体像が，「ウエスカ出身」の「アバディアス」という名の「老人」として呈示されることになる。「ウエスカ」とは，スペイン北東部のアラゴン地方の都市名であり，スペイン内戦の際の激戦地の一つであった。この頃（1962.6.23）友人宛に書いたある書簡の中で，ツェラーンは次のような事実を伝えている。

> ぼくたち（＝ツェラーン一家。筆者注）は数日間ノルマンディー地方の田舎へ出かけます。そこはノナンクールとダンヴィルとの間にある静かな小さな村で，質朴な，本当に人間らしい人たちが住んでいます。そのなかに一人のウエスカ出身の老羊飼いがおります。共和制支持派の亡命者たちとともにノルマンディー地方に住み着くことになったスペイン人です[25)]。

またツェラーンの妻ジゼル・ツェラーン＝レストラーンジュも，「アバディアス」とは，かつてはスペインの革命家であったが，羊飼いとなって現在はブルターニュに住んでおり，何年も前からツェラーン一家とはなじみとなっていたという事実を伝えている[26)]。そしてさらに彼女は，「子羊を左にして」という詩句に関しても，ある逸話を伝えている。それによると，羊が左右のどちら側で草を食んでいるかによって，幸運がもたらされるか不運に見舞われるかが決ま

るという俗信があり，ツェラーンはいつも，「正しい」側に立って羊たちの横を通り過ぎるように心がけていたということである[27)]。ギムナジウム時代より左翼的な世界観を信奉するツェラーンにとって，「正しい」側とは常に左側なのであり，老革命家アバディアスにあっても事は同じなのだ。この，現在は羊飼いとして生きる亡命の老革命家アバディアスは，詩のなかで「人間的気高さの／ひとひらの雲」と表現されているように，そして手紙のなかでも「本当に人間らしい人」と言っているように，ツェラーンの理想的人間像なのでもあろう。その「アバディアス」が，「私たちの手」のなかに「私たちが必要とした言葉」を語ったとされる。「私たち」とは，ツェラーン自身をも含めて，第一節における「パリノ／人民」ないし「パリノ／人民」にまつわる人たちと連帯して，圧制や差別に抗し，ファシズム的な反動勢力と闘おうとする人々を言うのであろう。しかし「私たち」には，今ひとつの形姿も投影されていると考えなければならない。異稿の一つにおいて，「アバディアス」はAbadiasではなく，Abdiasとなっていた。AbdiasとはObadjaのラテン語読みであり，ヘブライ語のObadjaとは旧約聖書の『オバデア書』における預言者の名前である。『オバデア書』とは，神エホバが預言者オバデアの口を借り，イスラエルに敵対するエドムをはじめとする国々に神罰が下ることを予言するという内容の書であるが，そこには「セファラデ（ヘブライ語でsepharadh。ドイツ語ではSepharad）」という地名が出てくる。この地名が現在の何処を指すものなのか諸説があって詳らかでないが，このセファラデから「セファルディー（Sephardi）」という語ができたのであり，そしてセファルディーとは，周知のように1492年にスペインから追放されて放浪することになったユダヤ人たちを指す。つまり，「アバディアス」という人物の姿を借りてツェラーンが浮上させようとするのは，フランコの支配するスペインから亡命せざるをえなくなった人々だけではない。ツェラーンは旧約聖書における預言者オバデアとユダヤ人たちを，「アバディアス」と「犬たち」（ユダヤ人はかつて「犬」という侮蔑語で呼ばれることがあった）の姿にオーバーラップさせようとしたのである。それは第一節のSchibbolethというヘブライ語から派生した語によって暗示されていたことでもあった。したがって「私たち」には，ツェラーン自身をも含めた20世紀における流亡のユダヤ人たち――ファシズムやナチズムによる迫害，ひいては反ユダヤ主義やネオナチズムの策動にさらされた人たち――の姿も色濃く投影されていることを忘れてはならないだろう。そうした「アバディアス」が，「私たちが必要とした言葉」を語るのであり，そしてその言葉は「牧人のスペイン語」であるとされる。

「スペイン語」とは，詩の第一節のNo pasaránを指すと考えなければならない。「ウエスカ」出身の「アバディアス」は，かつてはスペインの共和制支持の革命家であり，内戦時にフランコが率いるファシズム勢力にたいしてNo pasaránという言葉を発したに違いないからである。しかし「牧人のスペイン語」とは，単に老羊飼いである「アバディアス」が発したNo pasaránという言葉というだけの意味ではなかろう。この詩には，「牧人」という言葉から連想される語が含まれる詩句がある。「苫屋」および「平和」という，「牧人」から連想される牧歌的情景を表わす二つの語からなる，最終節の一行「苫屋に平和を！」である。つまり，先走って言っておくと，「牧人のスペイン語」とは，「奴ラヲ通スナ（ノー・パサラン）」と「苫屋に平和を！」とが「ひとつに」なった言葉なのである。それが，「奴ラヲ通スナ（ノー・パサラン）」と「苫屋に平和を！」という二つの語が，詩においてわざわざイタリックで強調されている所以であろう。しかし，「牧人のスペイン語」と

は，具体的にはどういう実質を持った言葉であるのか。

「牧人のスペイン語」という詩句は，「そのなかに」という場所を表わす状況語へと引き継がれる。そしてそこで第二節が終わり，第三節は「巡洋艦『アウロラ』の氷の光のなかに」という詩句でもって始められることになる。したがって「牧人のスペイン語」＝「巡洋艦『アウロラ』の氷の光」という図式になろうか。「巡洋艦『アウロラ』の氷の光」によって喚起されるのは，どの評者も指摘するように，かのロシア革命の本元としての，いわゆる「10月革命」である。1917年10月25日（ロシア暦）の凍てつく早朝に，首都ペテルブルク（ペトログラード）のネヴァ河を巡洋艦「アウロラ」（アウロラは「曙光」を意味するラテン語）がさかのぼってきて，かつては皇帝の，そして「2月革命」以降はケレンスキー政権の牙城であった冬宮に砲口を向けて碇泊した。そしてその数時間後に，巡洋艦「アウロラ」は反動の象徴としての冬宮に向けて砲撃を開始した。それが，世界で最初の社会主義国家の成立へと向かう革命の幕開けとなったのである。そして，その「巡洋艦『アウロラ』の氷の光」の中にあるとされるのは，「合図をする」「兄弟の手」である。「兄弟」とは，詩集『誰でもない者の薔薇』が捧げられた相手であるロシア詩人オシップ・マンデリシュタームであることは，第三節に使用されているいくつかの語によっても明らかである。とりわけ「ペトロポリス（Petropolis）」は，ペテルブルクのラテン語読みの古名であるが，マンデリシュタームがその呼び名を詩の中で好んで使ったことが知られているし，toskanischのロシア語の名詞形Тоскане（トスカナ）も，ツェラーンがある未発表の自分の長詩のモットーとした，マンデリシュタームの詩の中に見られる語である[28)]。また，断片に終わったある詩のなかでも，「兄弟オシップ（Bruder Ossip）[29)]」という言い方がなされているのが見受けられるし，ある手紙の中ではマンデリシュタームについて，「彼は，はるかかなたにありながら，兄弟のような存在でした[30)]」と語っている。そうした「兄弟」であるオシップ・マンデリシュタームの「手」が，「言葉の大きさの目から／取り外された眼帯を振って／合図をする」と云われる。「言葉の大きさの目」とあるように，「目」と「言葉」とが同じ大きさであるとされるのは，「目」は「言葉」の等価物だという意味であり，「目」にマンデリシュタームの詩のなかの言葉を，ひいては詩そのものを含意させようとするのであろう。したがってその目に眼帯が付けられていたとは，マンデリシュタームの詩が，いわば眼帯でもって目隠しをされた目と同じ状態に置かれていたということを表わす。事実，マンデリシュタームは晩年にスターリンを痛烈に風刺する詩を書いたことから，彼の詩は故国ソビエトにおいて抹殺され忘却され，長い間厚い暗闇のなかに閉ざされてきたのであった。彼は流刑中の1937年に亡くなっているが，彼の目から眼帯が取り外されるのは，すなわち彼の詩が正当な評価を受けて再び日の目を見るのは，スターリンの死がもたらしたいわゆる「雪どけ」後の1950年代の半ばになってからであり，それも故国ではなく，アメリカにおいてであった。1955年になって，ようやくニューヨークの書店からマンデリシュタームの作品集が刊行されたのであり，そしてツェラーンがその作品集を1957年に購入したことが知られている[31)]。

「巡洋艦『アウロラ』の氷の光」の中から，「兄弟の手」，すなわちマンデリシュタームの手が，合図を送ってくるとされる。これは，マンデリシュタームが，ロシア革命の渦中で書かれ，いまやっと日の目を見ることになった彼の詩でもって，彼にとって革命とは何であったかを語りかけてこようとするの意であるとまずは取れよう。では，マンデリシュタームにとって革命と

はいかなるものであったのか。それについてツェラーンがどう考えていたかは，『オシップ・マンデリシュタームの詩』という題でなしたラジオ放送用エッセイの中の言葉から，ある程度判断できよう。そこでツェラーンはこう語っている。

> マンデリシュタームは，たいていのロシアの詩人たち――ブローク，ブリューソフ，ベールイ，フレーブニコフ，マヤコフスキー，エセーニン――と同じく，革命を歓迎しています。彼の社会主義は倫理的宗教的な刻印をおびた社会主義であって，それは心に発するもの，ミハイロフスキーやクロポトキンに由来するものです。彼が革命前の何年間か，チャダーエフやレオンチェフ，ロザノフやゲルシェンゾーンの著作と取り組んだのは偶然ではありません。政治的には彼は左翼社会革命党に近いところにいます。
> 革命は彼にとって――そしてここでロシア的な考え方に特有の千年至福説的な特徴が顔を見せるのですが――他者の夜明けであり，虐げられた者たちの反乱であり，生き物としての人間の蜂起であり，まさに宇宙的規模の大変動なのです。（それは大地を蝶番から外してしまうものなのです）[32]。

ツェラーンはマンデリシュタームの革命思想を，倫理的宗教的な社会主義であり，心に発するもの，無政府主義者クロポトキンやナロードニキ主義者であったミハイロフスキーに由来するものと捉える。そして革命とはマンデリシュタームにとって，「他者の夜明けであり，虐げられた者たちの反乱であり，生き物としての人間の蜂起」であったとする。「他者の夜明け」とは，権力の装置としての歴史のなかにおける他者であるものたち，すなわち異邦人あるいは異民族として，共同体から隔離され，差別され，共同体の外へと排斥されてしまうものたちの復権と新生を意味しよう。マンデリシュタームにとって革命とは，そのようにすべての人間にたいする抑圧や差別の撤廃と，すべての人間が自由に人間的に生きることができ，個々の人間の生活や生命があくまでも尊重される世界の実現という，人類史上いまだかつてなかったような，「宇宙的規模の大変動」を意味したとツェラーンは考えるのである。そしてそれはまた革命というものにたいするツェラーン自身の考え方と重なるものであるのは言うまでもない。「牧人のスペイン語」とは，まさにそうした革命への志向を表わす言葉なのである。最終節の孤立して置かれた一行「苫屋に平和を！」は，マンデリシュタームおよびツェラーンが，クロポトキン同様に「暖かな人間性と生命」を尊重し，個々人が主体となったものとしてのみ革命を考え，ランダウアーと同様に暴力的な革命には反対であることを強調するためであろう。それが，フランス大革命の対句的スローガンから，「苫屋に平和を！」のみが選ばれた理由の一つだと捉えるべきである。そして，十月革命に代表されるロシア革命の発端を，そうした理想とする革命への序幕であると見なして，マンデリシュタームが歓迎したとツェラーンは考えるがゆえに，「牧人のスペイン語」と「巡洋艦『アウロラ』の氷の光」とが等値のものとされるのである（「光」や「アウロラ（曙光）」にたいして，「氷」や「巡洋艦」によって暗示されるのは，死や暴力と結びつく何か酷薄なものであり，それによってツェラーンは，やがてスターリン体制へといたるロシア革命の現実にたいするマンデリシュタームの幻滅を前もって示唆しようとしてもいるのだが）。

先に述べたように「ペトロポリス」とは，マンデリシュタームが詩のなかで好んで使ったペ

テルブルクの古名である。マンデリシュタームの生誕の地はワルシャワであるが，生後間もなく一家がペテルブルクへと移住したため，彼は生涯ペテルブルクを自分の故郷とみなしていた。この故郷としてのペテルブルク，つまり「ペトロポリス」へのマンデリシュタームの想いに，彼のロシア革命への想いが重ねられるのである。「忘れられない人びと」とは，まずはブローク，エセーニンといった，マンデリシュタームと同じくロシア革命期を代表する詩人たちを指すと考えてよかろう。彼らはいずれもユダヤ系の詩人たちであり，ツェラーンはかれらの詩を翻訳して出版している。そしてまた彼らはいずれも，ペテルブルクを活躍の場とし，革命への理想に心を燃やした者たちであった。ツェラーンがこの詩における「ペトロポリス」を，故郷のような懐かしさと憧憬に満ちた街であると共に，革命の理想（「太陽」）が発掘を待ち，革命の理想を求める人たちが集う空間として呈示しようとしたことは，何よりも詩『ひとつに』の異稿の一つの欄外に彼自身が記していた詩句が証明してくれる。それは „ВПетербурге МЫ сойдемся снова“ というロシア語であり，マンデリシュタームが革命直後に書いたある詩の冒頭の詩句である。この冒頭の一行以下の数行の詩句は，ツェラーンによるドイツ語訳を参照して和訳すれば，次のようになる。

ペテルブルクが私たちを再びめぐり会わせてくれるだろう，
まるで私たちが太陽をそこに埋めていたかのように，
そして最初に私たちの唇にのぼるのは
あの意味のない，至福の言葉であるだろう[33]。

そしてこのペテルブルク，すなわちペトロポリスが，「きみの心にもトスカナのように横たわっていた」とされる。「トスカナ」とは，マンデリシュタームが敬愛した，イタリアのルネサンスを代表する詩人ダンテが生まれ育った地である。したがって「きみの心にも」の「きみ」とは，文脈からしてもちろんマンデリシュタームを指すが，「も（＝～もまた）」によって彼と類比されるのは，第二節の「アバディアス」であり，「私たち」であるとともに，またダンテでもあろう。「アバディアス」がスペイン内戦のために故郷の地「ウエスカ」から追われたように，ファシズムやナチズムに抗した人々や，そしてツェラーンもその一人であるユダヤ人たちが，故郷を喪失せざるをえなくなったように，ダンテも理不尽な政争に巻き込まれて追放され，死刑を宣告されまでして，故郷トスカナの地を再び踏むことはなく，孤独な放浪のなかで生涯を閉じたのであった。そうした人々の憧憬の対象である空間，そうした人々を出会わせ結び合わせてくれる空間の象徴として，ペトロポリスはあるのである。そしてまたこのペトロポリスは，「移動都市」でもあると言われる。人と人とを出会わせ，結びつけるものとは，「私は見つけます，結びつけるもの，…（略）…出会いへと導くものを。／…（略）…私は見つけます……子午線を見つけます[34]」と述べているように，ツェラーンにあっては何よりも「子午線」である。したがって人々を牽引し集わせる街ペトロポリスは，子午線としての都市であると共に，子午線上を移動する都市なのでもある。だからこそ，ロシアのペトロポリスを一旦離れて，われわれがそこを通る子午線上を移動してゆくとき，今ひとつのペトロポリスがわれわれの前に姿を現してくることになる。

「ペトロポリス」とは，かのブラジル南東部の，リオ・デ・ジャネイロ近くに位置する，避暑地として知られる山間部の小都市の名でもある。これは，19世紀の半ばごろにドイツ移民によって建設された街であり，シュテファン・ツヴァイクをはじめとする，ナチスに追われたユダヤ人たちの亡命の地でもあった。ツヴァイクはこの地で，1942年2月22日に服毒自殺を遂げたのであるが，発信地として「ペトロポリス」と書かれた遺書の中で，ブラジルに感謝し，長い夜の後になおも来るべき「曙光（die Morgenröte）」，すなわち「アウロラ」への願いをしたためている[35)]。彼にとっても「ペトロポリス」は，ナチズムやファシズムのような理不尽な勢力に抗してNo pasarán を発する者たちの集う街であると共に，マンデリシュタームの場合と同じく，故郷のような優しさで迎え入れてくれた場所でもあったのである。

「ペトロポリス」は，「忘れられない人々」の「移動都市」である。したがって「忘れられない人々」とは，ブロークやエセーニンといった人たちを指すばかりでなく，ツヴァイクのようにナチズムの犠牲となったユダヤ人たちも当然そこに含まれる。だが，そればかりではない。革命の街ペトロポリスとファシズムやナチズムに抗する人々の街ペトロポリス，そうした二つの街を繋ぐ子午線によって結び合わされ出会うのは，以上述べてきたような「パリノ／人民」やそれにまつわる人々すべてであり，そうした彼らが時空を超えて子午線上で「ひとつに」なって，「奴ラヲ通スナ（ノー・パサラン）」と「苫屋に平和を！」という合言葉を，すなわち「牧人のスペイン語」を唱えるのである。

注

1）Paul Celan: Gsammelte Werke in fünf Banden. Bd. I , Frankfurt a M. 1983, S.270.以下，この版に基づくツェラーンからの引用は，GWと略記し，ローマ数字で巻数を，アラビア数字で頁数を示すことにする。

2）GW III, S.196.

3）Vgl. Georg Büchner: Werke und Briefe. Wiesbaden 1958, S.85.

4）Vgl. Jean Bollack: Paul Celan. Poetik der Fremdheit. Wien 2000, S.33.

5）Arno Reinfrank: Schmerzlicher Abschied von Paul Celan. In: die horen, 16 (1971), Nr.83, S.73.

6）Paul Celan: Die Niemandsrose. Tübinger Ausgabe. Frankfurt a. M. 1996, S.106 f. 詩『ひとつに』の異稿に関しては，次のようないま一つの版もある。Paul Celan: Die Niemandsrose. Historisch-kritische Ausgabe. 6.Bd.・2.Teil. Apparat. Frankfurt a.M. 2001, S.230 ff. 本稿では異稿について言及する場合，もっぱら前者のテュービンゲン版の106～107頁を参照した。

7）Paul Celan — Die Goll-Affäre. Dokumente zu einer >Infamie<. Hrsg. v. Barbara Wiedemann. Frankfurt a. M. 2000, S.544. 原文はフランス語。本稿に掲載したのはドイツ語訳からの重訳である。

8）Petre Solomon: Briefwechsel mit Paul Celan 1957-1962. In: Neue Literatur, 32 Jahrgang, Heft 11, 1981, S.75. 原文はルーマニア語。本稿に掲載したのはドイツ語訳からの重訳である。

9）Paul Celan — Die Goll-Affäre, a.a.O., S.545.

10）パリの「タンプル大通り」から「シュマン・ヴェール通り」までは，大衆デモの伝統的なコースであった。Vgl.Die Niemandsrose. Tübinger Ausgabe, a.a.O., S.107.

11）1871年のパリ・コミューンの間，パリの住民にたいして »Peuple de Paris« という呼びかけ方がなされていたということである。Vgl. Paul Celan: Die Gedichte. Hrsg. v. Barbara Wiedemann. Frankfurt a.M.

2003, S.701.

12）Georg Büchner: a.a.O., S.333.

13）GW Ⅰ, S.131 f.

14）GW Ⅲ, S.202.

15）Briefe an Alfred Margul-Sperber. In: Neue Literatur, 26 Jahrgang, Heft 7, 1975, S.58. 太字部は原文ではイタリック。

16）Petre Solomon: a.a.O., S.75. 傍点部は原文ではフランス語。

17）Vgl. Israel Chalfen: Paul Celan. Eine Biographie seiner Jugend. Frankfurt a.M. 1979, S.62 ff.

18）A.a.O., S.64.

19）GW Ⅲ, S.190.

20）Wulf H. Ahlbrecht: Paul Celans späte Gedichte. Bonn 1985, S.26.

21）Edith Silbermann: Paul Celan im Kontext der Bukowiner Dichtung. In: Die Bukowina. Studien zu einer versunkenen Literaturlandschaft. Francke Verlag 1991, S.312 f

22）GW Ⅲ, S.179.

23）GW Ⅲ, S.157.

24）GW Ⅲ, S.158.

25）Paul Celan — Erich Einhorn: Briefe. In: Celan-Jahrbuch 7 (1997/98), S.31.

26）Christine Ivanović: Das Gedicht im Geheimnis der Begegnung. Tübingen 1996, S.93, Anm.54.

27）Paul Celan: Die Gedichte, a.a.O., S.701.

28）Vgl. Paul Celan: Die Gedichte aus dem Nachlass. Frankfurt a.M. 1997, S.71.

29）A.a.O., S.371.

30）Brief an Wladimir Markow, 31. Mai 1961. Vgl. John Felstiner: Paul Celan. Eine Biographie. München 1997, S.242.

31）Vgl. Bernhard Böschenstein: Celan und Mandelstamm. Beobachtungen zu ihrem Verhältnis. In: Celan-Jahrbuch 2(1988), S.156.

32）Paul Celan: Die Dichtung Ossip Mandelstamms. In: Ossip Mandelstamm: Im Luftgrab. Ein Lesebuch. Zürich 1988, S.75.

33）GW Ⅴ, S.159.

34）GW Ⅲ, S.202.

35）Friderike M. Zweig: Stefan Zweig. Eine Bildbiographie. München 1961, S.125. ツェラーンがツヴァイクの遺書を読んだことがあるかどうかは詳らかでない。しかし，ブラジルのペトロポリスとツヴァイクら亡命のユダヤ人たちとの関わりは十分承知していたはずである。